

ケアと虐待の境界域における虐待行為への自制的対応
——家族ハビトウスという視点から——

戸井田晴美（一橋大学大学院）

研究目的

本報告の目的は、ケアと虐待を包摂的に捉え直すことを基点とし、その境界とはいかなるものかを明らかにするとともに、子育てにおける行為と感情に着目しながら David Morgan の家族実践論をもとに検討することである。

虐待問題の解決を試みる際には、表層的にあらわれる虐待行為をどのように減らすのか、あるいはなくすのかといった考えに立脚することがある。たとえば、児童虐待の発見、通報、児童相談所による家族への介入のタイミングに関する議論などがあげられる。しかし、「なぜ虐待という一線を越えるのか、あるいは越えないのか」という疑問には答えきれない。ケアと虐待の関係を理解するためには、虐待が起きた後だけでなく、虐待が起きる前にも目を向けることが重要なのではないだろうか。

これまでの虐待が起きる前への注目は、子どものいる家族に向けて児童虐待の「早期発見・早期対応」などを掲げ、家族の外側から支援の枠組みを形成しようとする予防的な観点にもとづくものが多かった。一方で、本報告の出発点は、表層的にはケアとして見なされ、虐待には至らない段階にある家族の内側からの視点にある。具体的には、授乳や抱っこなど、親がさまざまなかたちで子育てをしているなかで、心では子どもに虐待しかねないような負の感情が生じているなど、行為と感情の差異に着目していく。

研究方法

2022年2月から2023年9月の間にかけて実施したインタビュー調査のデータを用いる。調査の対象者は、子育て（全員）や介護（一部の対象者）などのケアの経験者18名である。半構造化面接法を用いて、1時間から2時間にわたって実施した。

本報告では、Morgan による「家族実践」概念の視座から分析を行う。とりわけ「家族ハビトウス」(Morgan 2011=2017: 140)に着目しながら検討していく。さらに、Morgan が、Bourdieu による「ハビトウス」の概念に依拠しつつ、これまでのハビトウスの説明で感情の内容が見落とされていること、ハビトウスが安心だけでなく、「フラストレーションやアンビバレンスを生み出すこと」(Morgan 2011=2017: 196)を指摘する点に留意している。

結果と考察

インタビュー調査の結果、虐待の「種はみんなある」と捉え、虐待が子育てのプロセスにおいて内在するものとして語られた。その一方で、子育てのなかで、子どもに対して虐待をする場面を想像することがあっても、実際には虐待には至らなかったという事実から、行為と感情との間に差異が見られた。つまり、ケアにおける虐待の潜在的な普遍性が浮かび上がったものの、ケアという行為において虐待に至りかねない負の感情が生じて、結果的にはケアに回帰していた。換言すれば、家族の外側からの支援による予防的な観点にもとづくものではなく、家族の内側において、虐待にかかわるような負の感情を実際の行為に移す前に自制していたことになる。

そして、虐待をしない子育てが日常的な家族実践として成立している背景には、その行為に影響を与える性向、すなわちハビトウスによって自制に方向づけられた可能性がある。日常的な家族実践が、「家庭内におけるハビトウスとして大事にされるようになっていく」(Morgan 2011=2017: 250)ことを踏まえるならば、ケアから虐待に至る可能性を秘めていたとしても、結果的にケアに回帰するという行為を説明することが可能になるのではないかと。

文献

Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタシオン I・II——社会的判断力批判』藤原書店。)

Morgan, David. H. J., 2011, *Rethinking Family Practices*, Palgrave Macmillan (=野々山久也・片岡佳美訳, 2017, 『家族実践の社会学——標準モデルの幻想から日常生活の現実へ』北大路書房)。

(キーワード：ケア、子育て、虐待)